

体系の内なる非体系

——ヘーゲル『論理学』における矛盾の考察——

中西 智 美

すべての意味のある行為は、各々独自のシステムを有する。そのシステムの内では部分は部分としての意味を保持しつつ、しかしその単独の機能にとどまることなく全体を構成する要素として作用する。ここでこの作用は＜関係＞といいかえてもいいだろう。そして全体は全体として、いっさいの部分的関係性を統一したものとして我々の前に現れる。ヘーゲルは『精神現象学』の序論において、「真なるものは全体である」(PdG-15) といった。この全体とは「ただ自己展開を通じて己を完成する実在」(同上) であり、もちろんここでヘーゲルが自身の絶対者観について述べていることはいうまでもない。しかし、非常に有名なヘーゲルのこの言説に対して、我々はもっと注意深くなるべきではないだろうか。ヘーゲルの弁証法的論理展開は、単なる形式的な論理学上の枠組みを越え、我々人間存在の様々な生の局面を現実 に即して描こうという試みである。自己展開は絶対者のそれのみではなく、有限者の存在そのものにも確かに実在し、我々はその展開を自己の生として生きる。そして様々な意識的経験を通じ我々は知る。

存在には＜矛盾＞が内包されてある。

存在はそれ自体一個の＜体系 das System＞である。体系という全体をその構成要素の円還運動として見てとる際に、契機としての矛盾は必然的に存在することになる。そうでなければ運動は滞ってしまうからだ。存在という体系は体系として静止しているのではなく、全体は全体として停止しているのではない。常にすでに動くものである。その運動のさなかに、我々は契機としての矛

盾にぶつかる。ならば「真なるもの」の内には本質的に矛盾が含まれていることになる。そして確かに我々は現実的な意味での矛盾の存在を知っている。それではいったい存在に本質に関わる矛盾とはいかなるものなのだろうか。

この問題に対して何らかの解答を与える手助けとして、ここではヘーゲル『論理学』において矛盾というものがどのように扱われているかを、そしてヘーゲルの思想的な体系構造に矛盾がどのような作用を及ぼしているかを検討してみたい。その論理構造に見え隠れする矛盾という契機は、あるいは矛盾そのものは、関係統一態としての体系を構築している人間存在にどのように関わっているのだろうか。

第一節 本質的存在における契機としての矛盾

ヘーゲルの議論には各所に＜矛盾 *der Widerspruch*＞がその横顔をのぞかせるが、弁証法という論理的技法において必要不可欠であるこの矛盾という契機を正面から取り扱っているのは『論理学』第二巻本質論の第一篇第二章である。ここでは「本質性または反省規定 *Die Wesenheiten oder die Reflexionsbestimmungen*」という章タイトルのもと、＜同一・区別・矛盾＞という三契機として矛盾の構造が語られる。しかしこの章に先立ち、本質論において最も重要であると思われる＜反省＞の概念について論じられている。反省規定という作用の内に矛盾はその姿を明確に浮き彫りにされていくので、まずは反省という概念についての考察から始めることにしよう。

1. ＜本質としての反省規定＞

＜反省（反照）*die Reflexion*＞とは自己へと照り返す本質である。本質とは、ここではすでに存在の直接的な状態から再び自己へと行きついた存在であるから、そういう意味では止揚されたものとしてある。つまり、本質とは自己の内へと照り返している存在であり、「本質は反省である」（WdL, II-24）。この反省においても成（*Werden*）と移行（*Übergehen*）は行われているのであ

るが、有 (Sein) の段階とは違い、この成と移行は自己自身の内で (反省の内で) 行われるので、この運動は無から無へと向かう⁽¹⁾。つまり、「反省的運動は否定それ自身としての他者であり、この否定は自己に関係する否定という意味でのみ有をもつ」(WdL, II-24) ののである。この自己内での成や移行はその運動の中で自己を止揚する。この否定性は純粋な絶対的反省として更に自己自身をも規定する。それはまず<措定的反省>としてあり、そして段階を経て<外的反省>となる。

措定的反省の段階では、反省は前提された直接性の否定としての反省、つまり前提的反省である。しかし、止揚の働きとしての反省が自己に対して前提する直接性は、それ自身としては止揚されたものとしてあるにすぎないが、以後そのままとどまっているものではない。何故なら否定性は自己を否定的なものによって否定し、いったん他者的なものとしてとらえ直すことをしない限り、単なる同語反復的運動に陥ってしまうからだ。ここで直接性は自己とは異なるもの、否定的なもの、すなわち他者として、自己とは対立するものとして規定される。否定性を通じて反省は規定的側面をもち、反省は規定的となる。「反省がこのような自己規定性に基づいてある前提をもち、自己の他者としての直接的存在から出発するとき、反省は外的反省となる」(WdL, II-28) のである。

ここで外的反省が前提しているのは「自己の否定者としての自己」(同上) である。いいかえれば、外的反省は止揚されたものとしてある自己を、つまり反省としてある自己を前提し、その上で自己を規定するという側面を帯びているのである。このような規定性のために外的反省は二つに分かたれる。一方は前提されたものの反省、直接的であるところの自己反省であり、もう一方は否定的なものとして自己に関係する反省である。外的反省とは規定的側面をもちつつも再び措定された自己への還帰をも含むものなので、外的反省は措定的反省を止揚した存在である。すなわち「直接的存在は反省によって、反省の否定者として、または反省の他者として規定され」(WdL, II-30) るのだが、しかし反省はこの規定を否定するものでもある。ここに、措定的反省を止揚した外

的反省はその外面性をも止揚され、反省の自己否定的な措定は直接的存在との合致となる。すなわちこの合致は存在の本質的な直接性そのものである。したがって外的反省はすでに外的なものにとどまらず、同様にまた直接性そのものへの内在的反省であることが示される。ここで反省は規定的側面をもちあわせる。「規定的になるものとしての外的反省は、止揚された有のかわりにある他者を、しかも本質(としての他者)を措定する」(WdL, II-32)のである。

このように反省は自己展開的段階を経て規定的反省となった。この反省はまさにヘーゲルの弁証法論理における本質とっていいだろう。措定的反省と外的反省の統一としての規定的反省は、自己自身へと反省した関係であると共に、自身における他者としての存在、つまり自己の否定として止揚された他在でもある。その限りでは反省の規定性は自己の内に静止してあるものではない。自己としてあることと他者としてあることの関係は、移行という運動を通して反復的に行われる。つまり反省規定はいったん他者として規定されたものを再び自己内に取り戻す。その際、否定の作用自身は自己と本来同一のものとなり、自己自身と自己の他者とは統一されようとする。その意味でこの否定は常に自己へと向かおうとする本質であるといえる。直接的なものを否定することで直接性そのものに立ち返り、本質はその始源に還帰する。本質としての反省規定は無限に繰り返される自己関係なのである。

2. <同一・区別・矛盾>

ここまで見てきたように、<反省>とは本質としての自己への還帰運動であった。本質は常に反省としてある。本質は自己との同一態であり、自己同一は反省の直接態である。この本質的なく同一(同一性) *die Identität*>は、自己否定であるという点で自らを自らと区別している。この<区別 *der Unterschied*>という作用はむろん自らの内にあり、また自己へと反照し、そして同時に自己を突き放している。しかし突き放された自己はむろん自己へと帰ってくるのであるから、この突き放しは自己反照そのものである。したがってここでいわれる同一性は、「自己自身と等しい区別であるような同一性」(WdL, II

-39) である。だが、この自己反照として自己に相対的な区別は、ここではまだ本質的な規定ではない。同一が区別という規定に入ることにより、区別は同一性を止揚したものとしてそれ自体自己に関係していく。区別によって区別されたものはそれ自身同一でもあるのである。しかしこの自己関係態である区別は、自己の他者でもある。自己はその内に自己の他者であるところの区別をもつ、ということになる。つまり、区別の内には同一と区別という二つの契機が存在する。そしてこの二契機は<差異 die Verschiedenheit>となって区別に新たな局面をもたらすことになる。

こうして区別は差異性へと移行する。区別における二契機としての同一と区別そのものとは自己自身へ反省したもの、自己に関係するものとして差異的なものである。ここで両者は相互に規定されているのではない。差異において区別と同一とは互いに無関心なく差異あるもの>として関係しあっている。したがって、自己に対する否定性の否定ということを考えると、差異はそれ自身すでに<対立 der Gegensatz>としてある。この対立の内では同一と差異とが統一されてあり、各々自らの内に他者たる契機を含む限りその立場は他在に向かっている。

ここで整理してみよう。区別は同一と区別という両側面を契機として自己の内に含んでいる。しかし、差異においてはこの二つは無関心に分離していた。そして対立においては互いに規定しあっているにも関わらず排除しあっている。ここでこれらの諸契機は、それ自身契機でありながらも全体として自らを構成するという存在として二重の意義をもっている。対立において各々は全体として自らの他者により媒介されているのである。つまり他者を含み、なおかつ他者に向かって開かれている。そしてまた同時に自らの否定性において自らとも媒介されてある。自立的な反省行為とは「他の規定を含み、そのために自立的であるのと同じ観点において、他の規定を排斥するのであるから、それはその自立性の内において自己自身の自立性を自己から排斥している」(WdL, II-64) のである。よって、自立性とは<矛盾>なのである。同一も区別もそれ自体では矛盾的存在である。何故なら、同一は同一でありながらすでに区別

であり、区別は区別でありながら同時に同一でもあるということになるからだ。この区別のような同一、あるいは同一のような区別とは矛盾的存在である。肯定的なものと否定的なものとは互いに自己自身を排除し、各々は移行という作用を通して自らを反対へと移しておく。すなわち、対立しているものが次に来る統一へと移行するのは、実は矛盾の存在によるものなのである。

同一、区別、差異、対立が各々帰するところは矛盾である。矛盾はその内に自立性の排斥という自己矛盾的な作用を含み⁽²⁾、更に自己統一という全体性を目指す。そしてヘーゲルは「矛盾は解消する」(WdL, II-67)という。一見すると、ヘーゲル論理学において、矛盾という概念はその存在の始源においてすでに解消されるべきものでなくてはならないように思える。対立において各々自立的にあった同一と区別という契機が、同時にまた非自立的に、いいかえるならば他者依存的にしか存在できないという側面を矛盾自体が含む以上、矛盾はその内にある構造的自己矛盾をそのままにはしておかないからだ。「否定の否定は肯定」(WdL, II-64)なのである。ここに自己の同一性と非同一次性とは同時的に存在する。直接的なものへの最初の否定は、更に高次の段階を必然的に目指すかたちで再び否定される。この二番目の否定こそ解消されるべき矛盾である。そして直接的なものは自己内に取り戻され、止揚された存在としてそこにある。

ヘーゲルのいう矛盾とは、ここまで見てきたように、自己規定的な反省において自己自身を突き放し、そして再び取り戻すという運動を促す契機である。また同時に、自己の自己に対する否定と、その否定自体を否定することで自立性を保つという自己矛盾的存在である。矛盾の内にあるところの自己自身を排斥する反省は、常にすでに措定する反省でもある。つまり矛盾は常に反省規定として語られ、対立としての諸契機を動かすものとして、現在完了的な時制の元に語られるのである。矛盾はそれ自体零(Null)ではない。「有でありかつ非有である」という命題は同時的に存在可能なのではなく、瞬間として次に来ってくる移行への扉である。そういう意味で矛盾は同一であり、かつ区別である。またそれと同じ意味で、自立的な対立は自己の同一性における有と非有を

自己媒介という作用において、まずは矛盾という存在形式そのままに、そしていずれは解消され統一されるものとして自体的にもつのである。だがここで、この自体という言葉に我々は注意しなければならない。「それ自体」というときの自体は、全体としてそれだけであるという意味でもあるのだが、ヘーゲル論理学に即して言うならば、この全体は真なる全体ではない。矛盾は矛盾としてそのまま留めおかれるのではない。必然的に解消され、自己の存在根拠へと移行してゆく。こうして矛盾は本質的存在の契機として、弁証法的論理展開に即した存在において重要な意義をもたざるをえないのである。

第二節 体系の構造における矛盾

それではここで、『論理学』の全体的な構成に目を向けてみることにしよう。まず全体は＜第一巻存在論・第二巻本質論・第三巻概念論＞と大きく三つに区切られ、存在論は＜質・量・度量＞、本質論は＜本質・現象・現実性＞、概念論は＜主観性・客観性・理念＞とそれぞれ三つに区切られている。そして各章、各節があきれるほど整然としたかたちで三つずつにくざられているのだが、この三という数がヘーゲル論理学において大きな意味を持っていることはいうまでもない。＜正一反一合＞といってしまうと簡単そうだが、この構造は目に見えるかたちほど単純ではないように思われる。ここではヘーゲルの弁証法の構造において、前節で考察した矛盾という契機がはたしている役割について、そして矛盾に内包されている自己矛盾的性格について考えてみたい。

1. ＜概念の構造＞

ヘーゲルは『論理学』の終わり、＜絶対的理念＞において、「実は矛盾の思惟こそ概念の本質的契機である」(WdL, II-563)と述べている。ここでいわれる＜概念 der Begriff＞とは通常使用される一般的な言語的意味とは随分異なるもので、きわめて特徴的であるといえる。この＜概念＞は、あくまで具体的普遍でなければならない。いいかえればそれは現実性の内における本質であ

り、実現されたロゴスである。ヘーゲルの論理学が＜存在の運動の論理＞として展開される限り、概念とは現実性を自己の存在の本質的契機とする＜本質＞であり、また＜実体＞でなければならない。

概念の内にもまた＜普遍的概念 *der allgemeine Begriff*＞、＜特殊的概念 *der besondere Begriff*＞、＜個別 *das Einzelne*＞という三つの契機が含まれている。この三つの区分はそれぞれが個別的な機能としてだけ働くのではなく、概念自体が自己を区分し与えるこの規定は「各自が全体性としてあることにおいて、それぞれに自己存在していた諸概念」(WdL, II-273)に他ならない。つまり、各契機が概念における一個の規定としてありながら、同時に各々が概念の全体としてあるということだ。

概念において概念の本源態であるところの＜普遍(的)概念＞は、単純かつ絶対的な自己関係態として概念そのものであり、かつまた概念の内に含まれてある。だが同時にこの普遍は同一態としてそれ自身において絶対的な媒介でもある。しかしそれは未だ「媒介されたものではなく」(WdL, II-274)、普遍はまだそれ自身の内においてのみ絶対的な媒介である。つまり、自分の含む全規定の否定性により自分を自己同一的に措定するものとして、普遍は概念の純粹なる自己関係態としてあり、これこそが概念の普遍性としてあるものである。しかし、この普遍性としての概念はそれ自身が区別を持っている。概念は一時もそこにとどまるものではなく、区別における普遍性として他のものと並立する規定的な、＜特殊(的)概念＞でもある。特殊は普遍性を含み、そして普遍性が特殊の実体をなす。しかもその特殊性は特殊として存する規定性によって普遍を表現しているのである。概念のもつ区別、または規定という作用が、特殊の特殊たる所以である普遍性を体現している。すなわち、概念がそれ自身全体性であり、普遍性としての自己自身への同一的關係であることが、同時に規定することであり、区別である。この区別における規定された概念が特殊性である。「特殊はそれが関係する他の特殊と共に同じ一つの普遍性をもつ。同時にそれらの種の差異性 (*Verschiedenheit*) も、それらの普遍と同一性のために、そのものとしては全体性 (*Totalität*) である」(WdL, II-280)。

そして、この規定された概念が自己反省という契機を通して、その区別の相においてそれ自身が普遍的概念であると反省されたとき、それは<個別(的概念)>となる。つまり<個別性>とは、規定された<普遍性>としての<特殊性>によって措定されているものであり、それ故そのまま自己へと関係する規定態である。ここで個別性は概念の自己を介しての媒介である。と同時に、それは個別性の二方向への特質を現している。つまり、一方では自己反省を通じて<普遍性>から媒介されたものとしての<個別性>、そして他方では自分自身を媒介するものとしての<個別性>である。<個別性>が自己関係態としてあるということは、このように多様な側面を有しつつ関係が関係としてあるために、また関係それ自身のために作用するといえるだろう。

概念が、あくまで具体的普遍でなければならないということは、概念そのものがまさに<普遍>と<特殊>とが綜合された<個別>としてあるということである。しかも概念それ自体が自己関係という媒介として運動している。運動するということは停止しないということにはほかならない。ヘーゲルのいう論理の体系において、<停止>するということは規定され限定されるということではなく、誤解を恐れずにいうならばそれは<生命としての死>を意味するといってもよいのではないか。概念の全体性とは部分と部分との綜合という外面的な規定としての作用でもあるのだが、同時に活動し続ける、生き生きとした生命的なものという内面的な性格をも併せ持つ実体的なものでもあるのだから。

したがって、実体の純化されたものとしての概念もやはり概念としての場にとどまることはない。概念はもはやただ端的に個別性としてあるのではなく、その先への自らの方向性を内に含んでいる。概念には区別という作用が内実していることはすでに見た。根元的な統一であるところの概念が自己分割し、区別の相における概念が<判断 das Urteil>である。この判断とは個別にして普遍である概念における判断のことである。判断は元々は主語と述語との関係の規定であったのだが、ここではすでに根元的統一としての概念において、客観的真理として判断一般の真理である。ここで主語と述語は絶対的同一の関係へとすでにその関係性を移している。そういう意味ではこの判断は絶対的でも

ある。根底にある概念そのものが判断において自己回復することは、判断そのものの止揚である。ここで判断における止揚された概念と、その他の概念との関係に判断自体が移行していくことになる。いいかえれば、判断と判断との関係が概念そのものである限り、概念そのものが回復され実現される過程が問題となってくるのである。この判断の自己回復が＜推論 *der Schluß*＞である。判断が推論になるということは、判断と判断との関係が、つまり概念と概念との関係が必然的な関係としてあるようになる、ということでもある。この意味でも推論は判断と概念との統一体であり、両方の真理である。判断から再生した概念は具体的概念としての推論であり、最初にあった直接的概念とその自己分割としての判断との統一であろう。そういう意味では推論は媒介された概念であるともいえる。

2. ＜非体系なるもの＞

このように、運動する概念は概念、判断、推論という各契機を展開していくことによって、自己を認識し、そして否定し、そして回復していく。その過程において概念は純化され、統一され、新たに再生しながら前段階の自己をも保有している。そしてこの概念の内には、普遍、特殊、個別という三つの側面が止揚されてある。形式として見ると、この展開は先に見た矛盾概念の展開と同様の道筋をたどっている。同一、`区別、矛盾という三契機は各々が全体として一個の体系を描きつつ、それ自体がより大きな体系に包まれるようにしてある。実体的本質としての概念とて同じことだ。解消されるべき矛盾は、必然的に解消され、止揚されたものとして概念の内にある。

そこで、ここであえて＜非体系的であるもの＞について考えてみるのが我々にとって必要なのではないだろうか。＜非体系＞は＜反体系＞とはその意を明確に異にする⁽³⁾。反体系といったとき、体系はすでに概念も、概念化されたものも、概念化されないものをもすべてその懷に含んだかたちで、個別に敵対するものとして存在している。しかも同一化という作用から抜け落ちたこの裸の個性は、体系に相対するものという特性自体がその自立的自己の根拠

となっているのにも関わらず、やはりすでに一個の体系としてあらざるをえないのだ。反体系という立場は、前提的にその内側に体系を含んでいる。ただその外面的な覆いを嫌ったものにすぎない。

では、＜非体系＞という表現ではどうだろう。非体系ももちろん一個の体系であり、当然ながら体系の内に含まれているものである。しかしその姿は体系という全体の内において多少異質なものである。ここではこの非体系を＜矛盾に内包された矛盾＞と定義したい。矛盾というひとつの体系における感覚的な異質、あるいは躓きとでもいうべきだろうか。ヘーゲルの用語を借りるならば、矛盾における矛盾はいまだ何物にも媒介されない直接的なものである。むしろこの矛盾はヘーゲル的概念における存在の本質的契機としての矛盾とは別物だ。解消されるべき矛盾に対して、未解消であるべき矛盾である。この矛盾があるからこそ、ヘーゲル弁証法における始源の直接的なものは、その論理構築の体系の根底にある。自己は自己に対する他者の存在を知る前に、自己の内なる異質に、自己という思惟体系における体系にあらざるものに出会っているのである。

確かにヘーゲルはこの根底的矛盾に対して＜非体系(的なもの)＞という名辞は与えなかった。しかし、概念の自己展開的運動がそのまま実体としての絶対者の自己展開を現していて、なおかつ絶対者がその自己を有限者の内に実現するのならば、それがヘーゲルの絶対者理解であるのならば、有限者の存在の内に宿命的に含まれる矛盾の存在がそのまま絶対者へと持ち越されることはその考えの内にあるはずである。人間の悟性的思惟がぶつかる矛盾という困難は、理性的思惟へと進まざるをえなくなるという契機的な意味のみならず、有限者の有限者たる所以である＜非体系なるもの＞という姿で弁証法の内に常にある。そういう意味では、契機としての矛盾は弁証法の二番目の段階としてあるのだが（有一無一成ならば無の立場）、根底的な意味での矛盾、非体系なる矛盾はむしろ弁証法の最初の第一歩、始まりの段階に深く関わっている。人間存在という一個の体系が弁証法的展開をたどって主観的立場から絶対的客観性を目指すとき、その始まりから内在としての矛盾は存在する。非体系はそれ自

体、体系の内では体系にあらざるものとしてあるという自己矛盾的存在なのである。しかしこの非体系こそ、まさに我々の現実の存在自体を存在ならしめているものだ。ヘーゲルが〈現実(性)〉というとき、その際には常にこの非体系なるものが意識されている。だからこそ、この偉大な体系家の論理構造は循環し、反復し、ときには矛盾律をそのまま擁護するかのような論述をとりながらも、常にすでに現在完了的に前進する。むしろヘーゲルの描いた壮大な体系は完成品として停止しているのではない。その内に明確に非体系なるものを含んでいる以上、我々はその論理の体系を、そしてそこに内在する非体系を、ときには我々自身の体系あるいは非体系として考察しなければならない。

注

* ヘーゲルの著作からの引用は以下の略記号を頁数と共に文中に示した。

PdG……G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, 1988, Felix Meiner Verlag

WdL, II……G. W. F. Hegel, *Wissenschaft der Logik. Erster Teil. Die objektive Logik. Zweites Buch. Die Lehre vom Wesen*, 1986, Suhrkamp Taschenbuch Verlag

- (1) *die Bewegung von Nichts zu Nichts* 反省としての本質の本性は「無から無への運動」である。すなわち反省運動としての本質が本質の否定として、むしろ否定の否定である本質そのものとしての仮象から、その否定の否定である本質に至る運動である。参考『ヘーゲル論理学の体系』武市健人著、(こぼし書房、一九九五年)
- (2) 自立性といえどもそれは常に関係性においてある自立性である。他者を排斥することで得られる自立性、いいかえれば他者依存的な自立はまさにそれ自体が矛盾的存在であるといえる。参考「存在と矛盾」高山守(『理想』一九八九年冬号)
- (3) <反(アンチ)体系>とはアドルノの用語を拝借している。彼は『否定弁証法』で同一化思考としての体系を批判し、あくまで非同一次性の立場に固執したが、カントの実践理性批判への言及にしても、ヘーゲルの体系的同一化作用に対する批判にしても、前提となっている体系の形骸から抜け出せてはいないように思える。参考『否定弁証法』テオドール・W・アドルノ著、木田元その他共訳(作品社、一九九六年)